

退溪 思想과 그의 現代的 意義

—新儒學의 展望—

東京大學
二松學舎大學
赤塚 忠

序

重要な意義のある第六回國際學術セミナーにおいて、卑見を發表する光榮を與えて下さったことを、會長韓博士、委員長朴教授ならびに關係各位に深く感謝します。

朱子學は、日本では、江戸時代（十七・十八世紀）に普及し始めてから、日本人の道義心を涵養するのに大いに貢獻しました。これには、韓國の先聖李退溪の影響もあります。現代でも、朱子學は日本人の道義心の一部の底流になっています。

しかし、朱子學受容の早期にすでに朱子學に對する批判と變容とがありました。これは何故であろうか。一、二のその例を挙げ、これを教訓として、朱子學に検討を加え、その發展すべき方向を探ってみたいと思います。

一．江戸時代前期における朱子學に對する批判と變容

江戸時代の前期、徳川幕府が林羅山（1583～1648）を儒官として朱子學を官學とする方針を定め（1607年）てから數十年後、山崎闇齋が出て、朱子學の普及に大きな貢獻をしました。彼は、民間に在って、朱子學の教育に従事し、その門に學ぶ者は六千人、その余風は明治維新以後にも及んでいます。彼は、朱子の「持敬」（居敬）を主義として嚴格な教育を施し、人材を育成しましたが、朱子の「窮理」の面では缺けるとされ、また朱子の

太極・形而上・下などについて説くことは詳かではありません。これは、朱子學の一つの變容としなければなりません。

闇齋が朱子學者としての盛名を博している頃、朱子學に對する批判が興りました。なかでも、伊藤仁齋（1627～1705）は、商人から出て、獨學で、學者・教育者となり、初めは朱子學を學びましたが、のちにこれに反旗を翻えして、孔子・孟子の教えの古に復ることを唱え、活氣にみちた日常的道德の實踐、とくに仁愛を強調して、人々の尊信を集めました。その門に來り會する者は三千あったと伝えられています。またその始めた「古義學」という儒學の研究法は、現在でも先驅的意義があることを評價されています。仁齋は、ほとんど事ごとに朱子の説に反駁し、形而上下の分を認めず、「理」を死字とし、本然・氣質の異を排し、「復初」を退けています。

仁齋からやや後れて、貝原益軒（1630～1714）という學者が出ています。彼は、仁齋の説を批判し、自らは朱子學者を以て標榜する者ですが、やはり、朱子の太極説、理氣説などの形而上學的思辯を退けています。そして、彼自身は「事天地」を主義とし、日常的道德教訓の平易な著作を多く出し、人々に愛讀されきした。

このような朱子學に對する批判と變容がありました。それは主として朱子の形而上學的思辯に集注しているといつてよいでしょう。道德教育が普及する時期になぜこういうことがあったのでしょうか。江戸時代の學者に多少無理解があったかも知れませんが、新に道德を提起するには、朱子學に不適當なところがあったのではないかと考えられます。そこで次に少しく朱子學に検討を加えてみたいと思います。

二. 朱子の形而上學についての検討

朱子の道德思想は、周子（濂溪）の「太極圖並說」を基本として構成されています。そこで「太極圖說」を中心とし、朱子のそれに對する注解とその道德說とを併せ考えながら検討することになります。なお、朱子は形而上の太極を唯一最高の根據として論じているので、その思想を形而上學と稱することにします。

さて、朱子の形而上學について検討した結果を要約すると、その長所および短所は次のように考えられます。

第一に、「無極而太極」は、道德實踐の反省（否定を媒介とする内省）を基礎としているので、その形而上學は道德實踐の體驗的構造を主知的に開明する長所があるが、自發的な道德行爲を明らかにするには短所がありはしないか、と考えられます。

「太極圖說」の「無極而太極」のもとの形は、「自無極而太極」であるとされていますが、そのもとの形は「有生於無」「道生一」の類、つまり「自無而一」でしょう、されに、そのもとの形は、「無欲而獨（＝一）」でしょう。

道家は内省の體驗そのものを問題にしますので、何か思い迷うと心外の條件を否定して無欲無心に徹すれば、唯一の明智が得られると考えます。それが、「無欲而獨（＝一）」という圖式です。その否定追究の究極に「無」または道を想定すれば、「自無而一」「道生一」の類の圖式となります。

また、外界の物象は明智によって認識され、秩序立てられるので、これを普遍化して外界に投映すれば、「自無而一」「有生於無」ないし「自無極而太極」という圖式となり はては「無極而太極」となります。太極は内省の上か

らは最高の明智であり、物象の根元としては、朱子の主張するように、絶對普遍であり、しかも唯一でなければなりません。

ところで、こういう圖式化はありませんが、こういう内省の體驗は儒家にもあることで「内省不疚、夫何憂何懼」「己所不欲、勿施於人」（以上『論語』顔淵篇）、「多聞闕疑」（爲政篇）などは、みなこの内省を必須としています。そこで、苟況は積極的に道家説を採用して人心・道心の轉機を説いたわけで、朱子もそれを繼承しています。

道德の實踐に、内省が不可缺であることは、明らかな事實です。そこで、朱子・周子らは、これを基本にしているのです。ただし、道德の實踐には、「志於道」（述而篇）「我欲仁、斯仁至矣」（述而篇）のように、必ずしも内省を要しない、先覺、使命觀など、要するに自由な意志によるものがありますが、朱子が内省を基本としたことは、この面で手薄になりはしないかと恐れられます。

第二、中國には、上古から、「惟天監下民、典厥義、降年有永、有不永」（『尙書』高宗臚日篇）とあるように、上帝または天は、世界を正善に發展させるものだ。という信仰がありますが、周子・朱子が、上帝または天に代えて、陰陽家・道家の間に發達した太極という概念を使用しているのは、世界の有目的發展觀に代えて無目的 展開觀を導きこむことになりはしないか。もともと、周子・朱子は、太極に上帝（天）の靈威を兼ねさせて、太極は先天的・先驗的に完全無缺であり、道德的に至善であるとしている（「立人之道、日仁與義」）（『蓋上古神聖、繼天立極』）のですが、それはかえって論理の混亂を生じてはいはしないかと恐れられます。

第三、太極のように、形而上の唯一根元を立てて、形而下の諸現象に至る

までを組織的に論ずる、形而上學の試みは、秦の始皇帝初期の「呂氏春秋」から始まり、漢の武帝の時の「淮南子」に顯著な體裁となりました。「周易」も形而學的思辯の典型です。それだけでなく、「淮南子」に代表される形而上學的體系は中世に共通するもので、それを洗練して完成したのが、朱子の形而上學です。ところで、これらの形而上學は、全體の構造から個物を共通に規定しようとするので、人間についても、個々の人がさまざまな物と同次元に存在するものとして、つまり人間相互の有機的な關係を捨象して、全體のうちにおいて、人々はそれぞれ相離れて同じ位置、同じ價值を持つ者として取扱い、冷たい個人中心主義となりはしないかと思われます。

第四、周子・朱子の、形而下の諸物・諸現象に對する太極のように、道德實踐に、全宇宙的ではなくても、人類に普遍的な廣い達見が必要なことはいうまでもありません。孔子の「恕」、孟子の性善の信念、中庸の誠などは、この達見の上に立っており、ここにいわゆる心學の傳統があります。周子朱子の太極はこれをも繼承しているでしょう。しかし、この達見は、孔子の「一以貫之」が、その長年の經驗に裏打ちされているように、絶えず形而下の諸經驗によって檢證されていなければなりません。朱子は、これに應ずるように、存養（居敬）と問學（窮理）とを相併行するものとするのですが、太極を完全無缺とするので、これを經驗によって檢證し修正することは許されず、いきおい、太極一元による統制が主となって嚴格な道德説とならざるを得ないでしょう。

第五、周子・朱子は、形而下の諸物、諸現象は、根本的に相對・相反の陰陽二律によって展開すると説きます。これは形而上の絶對・無矛盾に對し、形而下の諸現象の展開は相對的であり、且つ矛盾に富んでいるとするもので

あって、形而下の現實界に對する嚴肅な觀察です。しかし、陰陽はもともと自然現象を解釋する法則なので、これによつては、諸現象ばかりでなく、道德行爲も、當爲の問題であるよりも、自然必然律に因ると説明される恐れがあります。また、相對的ということも、結局は、無目的な循環論となる恐れがあります。

第六、朱子は、形而上と形而下とは、「連續而非連續」の關係にあるとして、連續には、形而下の物の性に至るまでの理（太極）を挙げ、非連續には理に對する「氣」を挙げて、兩者の辯證的展開を説いています。（五行一陰陽也。陰陽一太極也。太極本無極也。）また、陰陽に加えて五行の概念を導入して、個々の物とくに個々の人がそれぞれ特質のある存在であり、しかも特殊であるが普遍性を有し、變化するが不變なものがあるという複雑な構造を画き、これによって、氣質の偏を改めて本然の性に復するという道德説を主張しています。

然五行之生、隨其氣質而所稟不同。所謂各一其性也。各一其性、則渾然太極之全體、無不各具於一物之中、而性之無所不在、亦可見也。明德者、人之所得于天、而虛靈不昧、以具衆理應萬事者也。然爲氣稟之所物、人欲之所蔽、則有時而昏。然其本體之明、則有未嘗息者。故學者當因其所發、而遂明之、以復其初也。

天以陰陽五行化生萬物。氣以成形而理亦賦焉。……於是人之生、因各得其所賦之理、以健順五常之德。所謂性也。……性道雖同、而氣稟或異。故不能無過不及之差。

しかし、個々の人が、「人之所以生、理與氣而已」（「語類」四）というように、理・氣合一の一箇の存在であるならば、とくに氣にも理を規制する

作用があるならば、その主となる本體は兩者を綜合し統一するものであって、理にも氣にも屬しないでしょう。また、「復初」は、氣に何か自律作用を認めないならば、本然の自然發現と回歸との圓環運動となってしまうでしょう。朱子は、ここに「心」の主宰を考えていた（「心主宰之謂也」「心統性情」）ようですが、その主體性を強調すれば、その性理説を危くしますので（「心者、主乎性、而行乎情」）、太極（理）、つまり、本然の性を本體とします。それで、本然の性が、至善・明覺であるのに對し、氣質はほとんどすべてが過不及の偏があることになり、従って、その道德實踐説は克己主義的、戒律主義的となりましょう。

三．結

以上を要しますに、朱子は、中國古來の諸思想を綜合して、宇宙的な壮大な規模で、精密に、主として道德實踐に關する形而上學を集大成しました。それは、偉大なことです、とくに、人間の現實界の諸矛盾に對する觀察を鋭くして、すべての人が等しく、ただ一筋に普遍的であり、絶對唯一の正善に歸する道德を嚴肅に行うべきことを説いております。私は、それがその最大の特色であり、またそれが道德を世に普及させる大きな推進力になったのだと考えています。

しかし、その形而上學は、道德實踐に對する反省から出發しているので、その構造についての精密な學問になったが、人の自發的な發意による道德實踐については手薄になっているのではないか。また、太極を形而上で、先天的・先驗的に明白であり、しかも形而下に通貫するとしているので、形而下の人間にあっては、それを戒律的にひたすら勵行することになり、個人の創意的な道德的發展の説明が窮屈になっていると思われます。

そこで、朱子のあと、中國では、王陽明が出て、これを反駁し、「天理」を自己の心にほとんど直接的に悟り、知と經驗的行とを合一して、「良知を致す」という自主的行動的思想を唱え、また、わが日本では、既述のように、朱子の形而上學を捨てて、日本の實情に適するような平易な道德的教訓を説きました。これも必然的展開であろうと思われます。しかし、これが朱子學を打破したとも、正當な發展であるとも思いません。王陽明の思想には、朱子の窮理のようなきびしい自己檢討がありませんし、伊藤仁齋・貝原益軒らにも樂天的な安易さがあつたと思われます。

そこで、私は、朱子が太極を掲げ、王陽明が天理を掲げるように、道德の實踐にとって、普遍的至善に奉仕することは、重要不可欠なことであると思います。ただし、それは、朱子の太極、王陽明の天理などのように、先天的・形而上的・抽象的ではなくて、人類の現象に即し、國情に適するいっそう具體性のある理念であつて、道德の實踐はこのような理念の追究であり、またその實現であろうと思います。

朱子の太極が諸現象を通貫する一元であつたように、道德的理念は可能な限り人類の文化に對する統一的達見でなければなりません。それは、朱子の説くように、先驗的に絶對ではないでしょう。もちろん、その理念を抱持するかぎりには、朱子の居敬のように、自分の全責任をかけなければなりません。それはまた學問と經驗とによつて絶えず改善される柔軟さと寛宥とがあるべきだと思われます。それが道德の進歩にもなるでしょう。

つまり、朱子の太極觀をわれわれの道德實踐の理念に改めるとともに、その格物窮理をとつてたえずそれを嚴肅な自己檢證とするのです。ひそかに、そこに朱子學の現代的意義があると考えています。

附錄：日本における最近の朱子學研究文獻目錄、大島 晃編

單行書、朱子學大系 全十五卷、1974～刊行中、明德出版社。

氣の思想－中國における自然觀と人間觀の展開、小野澤・福永・山井編、

1978、東京大學出版會。

朱子の自然學、山田慶兒、1978、岩波書店。

朱子（「人類の知的遺産」19）、三浦國雄、1979、講談社。

明請思想史の研究、山井湧、1980、東京大學出版會。

中國前近代思想の屈折と展開、溝口雄三、1980、東京大學出版會。

朱子文集固有名詞索引、東京大學朱子研究會編、1980、東豐書店。

論文、(1979) 朱子の哲學における「太極」、山井湧、「韓」8-5・6 合併號。

朱子の己發・未發說(一)、高畑常信、香山大學文研 四

言語と身體－朱熹の文學論、岡本不二朗、日本中國學會報 31

朱子學と陽明學、市川安司、二松學舎大學夏期講座陽明學特輯

比較思想的關心よりの朱子學研究の課題、O. Graf 神父の朱子學研究か

ら－ 湯川 敬弘、東方學 57

元代の朱子學と文教政策、W. T. ドベリー 中國哲學論集 9

1980

朱子の周易解釋について、小宮 厚、中國哲學論集 6

朱子の象數易思想とその意義、吾妻 重二、フィロソフィア 68

朱子の道教をめぐる一側面－「陰符經考異」考、末木恭彦、東方學 60

朱熹「鷺湖寺和陸子壽」詩について、松川 健二、中國哲學 9

朱熹の「心」に関する若干の考察、山井湧、中哲文學會報 5

朱子小傳、衣川 強、人文論集 15-4

朱熹と唐仲友、衣川 強、宋元代の社會と宗教の綜合的研究

1981

朱子文集に見える朱子の「心」-「心は一のみ」をめぐって、山井湧、

中哲文學會報 6

宋學における道統論について、大島 晃、中哲文學會報 6

朱子心性論の成立過程、福島 仁、日本中國學會報 33

「讀余隱之尊孟辯」に見える朱子の孟子不尊周一の對應、近藤正則、同